

# — 臨床 —

## 口腔顎顔面領域に発生した脂肪腫の臨床的検討

野池淳一, 清水 武, 五島秀樹, 川原理絵, 植松美由紀, 細尾麻衣, 横林敏夫

長野赤十字病院口腔外科 (主任: 横林敏夫部長)

## Clinical study of lipoma in oral and maxillofacial region

Jun-ichi Noike, Takeshi Shimizu, Hideki Goto, Rie Kawahara, Miyuki Uematsu, Mai Hosoo,  
Toshio Yokobayashi

*Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Nagano Red Cross Hospital*

*(Chief: Dr. Toshio Yokobayashi)*

平成 23 年 10 月 7 日受付 平成 23 年 11 月 15 日受理

Key words: lipoma, clinical study, intraosseous lipoma, ossifying lipoma, myxolipoma

キーワード: 脂肪腫, 臨床的検討, 骨内脂肪腫, 化骨性脂肪腫, 粘液脂肪腫

**Abstract:** In this report, we examined 32 cases of lipoma treated at our department from 1989 to 2009, and we compare these cases with 200 cases reported before in Japan. In our cases, the male-female ratio was 1.1:1 and most of the patients were over 40 years of age. The site of involvement was buccal mucosa in 11 cases (34%), tongue in 8 cases (25%) and lower lip in 7 cases (22%). The clinical diagnosis was lipoma in 16 cases (50%), fibroma in 7 cases (22%) and benign tumor in 6 cases (19%). The size of tumor was ranged from 6mm to 50mm, and the mean size was 15mm. The histopathological diagnosis was simple lipoma in 18 cases (56%), fibrolipoma in 12 cases (38%), and the other 2 cases were osteolipoma and myxolipoma. Consider about the cases reported before in Japan, the site of involvement was buccal mucosa in 75 cases (42%), tongue in 32 cases (18%), lower lip in 22 cases (12%), gingival in 21 cases (12%) and oral floor in 11 cases (6%). The histopathological diagnosis was simple lipoma in 126 cases (75%), fibrolipoma in 33 cases (20%) and the other type of lipomas were rarely found. In our cases, intraosseous lipoma, ossifying lipoma, and myxolipoma were extremely rare.

### 抄録

当科で1989年から2009年までに経験した脂肪腫32例について臨床的および病理組織学的に検討を行い、自験例の特徴を明らかにするために、本邦他施設の多数例報告論文との比較検討も行った。自験例では男女比は1.1:1であり、ほとんどが40歳以上であった。発生部位は頬粘膜が11例(34%)、舌が8例(25%)、下唇が7例(22%)であり、1例は顎骨内に認められた。臨床診断は脂肪腫が16例(50%)、線維腫が7例(22%)、良性腫瘍が6例(19%)であった。腫瘍の最大径は最小が6mm、最大が50mmで、平均が15mmであった。病理組織学的診断は単純性脂肪腫が18例(56%)、線維脂肪腫が12例(38%)、化骨性脂肪腫、粘液脂肪腫が各1例であった。一方、本邦他施設の多数例報告論文をまとめると、発生部位は頬粘膜が75例(42%)、舌が32例(18%)、下唇が22例(12%)、歯肉が21例(12%)、口底が11例(6%)であった。病理組織学的診断は単純性脂肪腫が126例(75%)、線維脂肪腫が33例(20%)であり、他はほとんどみられなかった。自験例と本邦他施設の報告例を比較すると、顎骨内に発生した1例、および病理組織学的に化骨性脂肪腫、粘液脂肪腫と診断された各1例はきわめて珍しい例であった。

## 【緒 言】

脂肪腫は分化した脂肪細胞からなる非上皮性腫瘍であり、身体の各部位に発生するが、上半身の軀幹や頸部に多くみられる<sup>1)</sup>。近年本邦において多数の施設より、頭頸部領域、口腔顎顔面領域、あるいは口腔領域に発生した脂肪腫の臨床統計的報告があるが<sup>2-10)</sup>、いずれの施設でも年間平均2例以下であり、これらの領域での発生は比較的新聞であると言える。

今回われわれは、過去21年間に当科で経験した口腔顎顔面領域の脂肪腫32例について臨床的および病理組織学的検討を行い、自験例の特徴を明らかにするために、自験例と本邦他施設の多数例報告論文とを比較し、考察を加えた。

## 【対象および方法】

対象は、1989年1月から2009年12月までの21年間に当科で腫瘍摘出術を施行され、病理組織学的に脂肪腫と診断された32例とし、外来診療記録および病理組織診断書をもとに、性別、当科初診時年齢、病悩期間、当科受診までの経路、発生部位、臨床診断、摘出物の大きさ、病理組織学的診断を調査した。

## 【結 果】

当科で病理組織学的に脂肪腫と診断された32例の概要を表に示した(表1)。

性別は男性17例、女性15例で、男女比は1.1:1で

表1 当科で経験した脂肪腫32例の概要

症例	性別	年齢	病悩期間	受診経路	発生部位	臨床診断	摘出物の大きさ(mm)	病理組織学的診断
1	男	69	4年	当院内科	舌縁	脂肪腫	15×15×12	単純性脂肪腫
2	男	30	3年	直接	下唇	線維腫	24×20×17	単純性脂肪腫
3	女	57	2年	直接	頬粘膜	線維腫	13×10×5	単純性脂肪腫
4	男	62	自覚なし	開業歯科	口底	脂肪腫	11×9×5	単純性脂肪腫
5	男	62	4年	直接	頬粘膜	線維腫	10×7×7	線維脂肪腫
6	男	75	15年	開業歯科	頬部から顎下部	良性腫瘍	20×15×10	化骨性脂肪腫
7	女	43	3年6か月	開業歯科	頬粘膜	線維腫	12×12×8	線維脂肪腫
8	女	42	3年	開業歯科	舌縁	脂肪腫	7×5×5	単純性脂肪腫
9	男	57	6か月	開業歯科	頬粘膜	脂肪腫	9×5×5	単純性脂肪腫
10	女	42	27年	直接	舌背	乳頭腫	13×11×8	単純性脂肪腫
11	男	70	3年	病院内科	舌縁	脂肪腫	32×23×20	単純性脂肪腫
12	男	7	5年	直接	舌背	線維腫	8×8×6	粘液脂肪腫
13	男	66	12年	開業歯科	下唇	脂肪腫	17×12×9	単純性脂肪腫
14	女	35	自覚なし	直接	下顎骨内	顎骨嚢胞	11×10×8	単純性脂肪腫
15	男	67	3週	病院外科	舌縁	脂肪腫	13×10×8	単純性脂肪腫
16	女	73	再発	開業歯科	オトガイ下部	脂肪腫	25×20×15	単純性脂肪腫
17	男	55	20年	直接	歯肉	脂肪腫	22×15×10	線維脂肪腫
18	男	65	自覚なし	開業歯科	舌縁	脂肪腫	9×8×7	単純性脂肪腫
19	男	46	1年2か月	開業歯科	頬粘膜	良性腫瘍	9×6×4	線維脂肪腫
20	男	66	1か月	直接	下唇	脂肪腫	15×9×9	線維脂肪腫
21	女	12	1か月	開業歯科	下唇	脂肪腫	8×7×6	線維脂肪腫
22	女	51	1年	直接	頬粘膜	良性腫瘍	6×4×3	単純性脂肪腫
23	男	66	1年	開業歯科	下唇	線維腫	10×7×6	線維脂肪腫
24	女	39	自覚なし	当科通院中	頬粘膜	良性腫瘍	10×8×7	線維脂肪腫
25	女	76	15日	直接	頬粘膜	良性腫瘍	8×5×3	線維脂肪腫
26	男	64	自覚なし	開業歯科	頬粘膜	脂肪腫	16×15×8	単純性脂肪腫
27	女	86	1年	開業歯科	下唇	良性腫瘍	12×5×5	単純性脂肪腫
28	女	80	5年	開業歯科	下唇	脂肪腫	10×9×5	単純性脂肪腫
29	女	49	1か月	開業歯科	頬粘膜	線維腫	7×5×5	線維脂肪腫
30	女	76	自覚なし	当科通院中	舌縁	脂肪腫	17×10×6	線維脂肪腫
31	男	83	自覚なし	開業歯科	頬粘膜	脂肪腫	15×10×10	単純性脂肪腫
32	女	15	2週	開業小児科	顎下部	脂肪肉腫疑い	50×45×20	線維脂肪腫

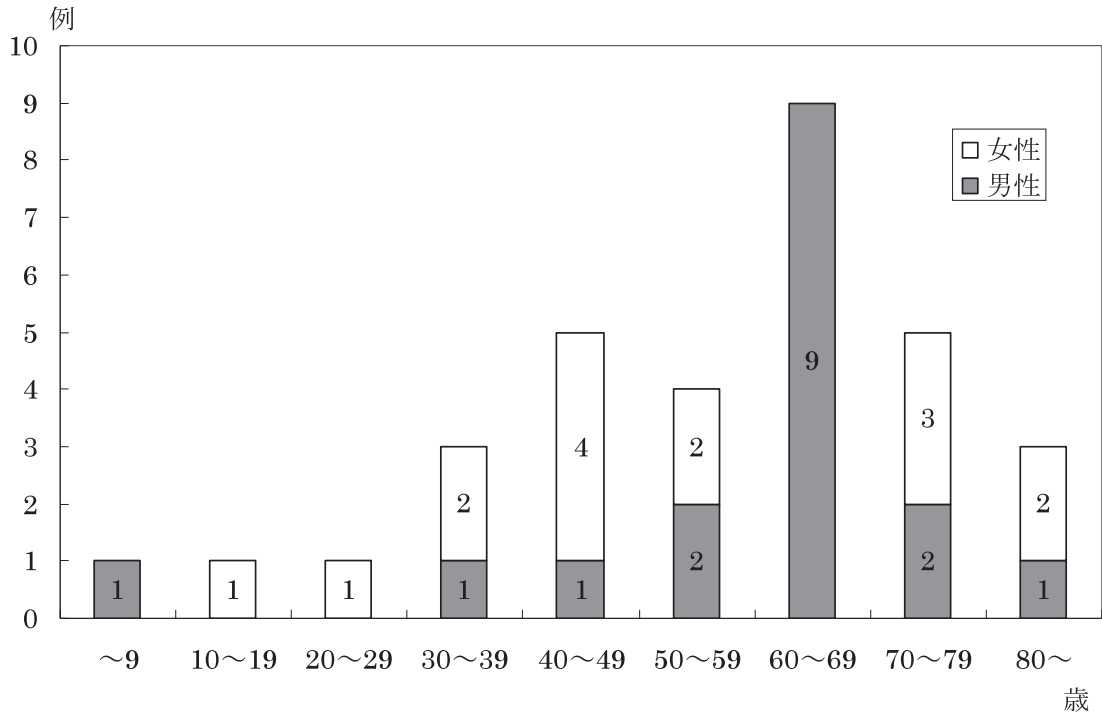


図1 性別および年齢別症例数

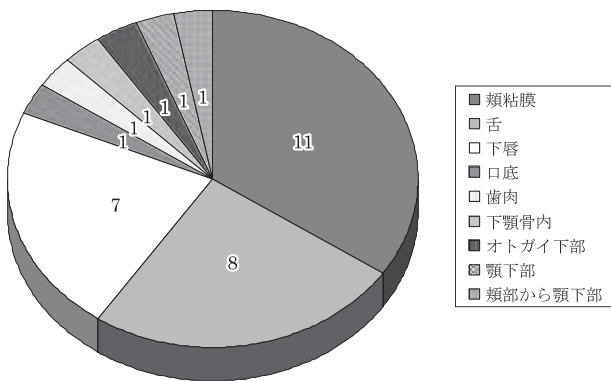


図2 発生部位

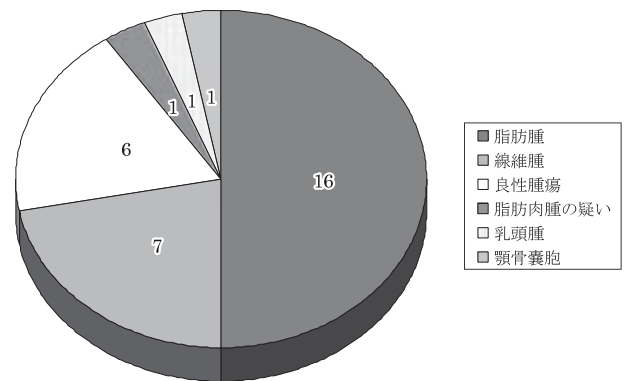


図3 臨床診断

あり、明らかな性差は認められなかった。当科初診時年齢は最低7歳，最高86歳で，平均56歳であった。年代別では60歳代が9例（28%）と最も多く，40歳以上が26例と全体の81%を占めていた（図1）。

病悩期間は1年以内のものが10例（31%）と多かったが，10年以上のものも4例（13%）あり，最長は27年であった。指摘されるまで自覚がなかった例は7例（22%）であった。なお，オトガイ下に発生した1例は再発例であった。

当科受診までの経路は，開業歯科からの紹介が16例（50%）と最も多く，直接当科を受診した例は10例（31%）であった。

発生部位は頬粘膜が11例（34%）と最も多く，次いで舌が8例（25%），下唇が7例（22%），口底，歯肉，下顎骨内，オトガイ下部，顎下部，および頬部から顎下

部にかけて発生したものが各1例であった（図2）。

臨床診断は脂肪腫が16例（50%），線維腫が7例（22%），良性腫瘍が6例（19%），脂肪肉腫の疑い，乳頭腫，顎骨嚢胞が各1例であった（図3）。

治療方法は全例で摘出術ないし切除術を施行した。摘出物の最大径は最小が6mm，最大が50mmで，10mm以下のものが14例（44%）と多く，平均は15mmであった（図4）。

病理組織学的診断は単純性脂肪腫が18例（56%），線維脂肪腫が12例（38%）であり，化骨性脂肪腫，および粘液脂肪腫が各1例あった（図5）。

なお，いずれの症例も当科での経過観察期間中に再発は認めなかった。

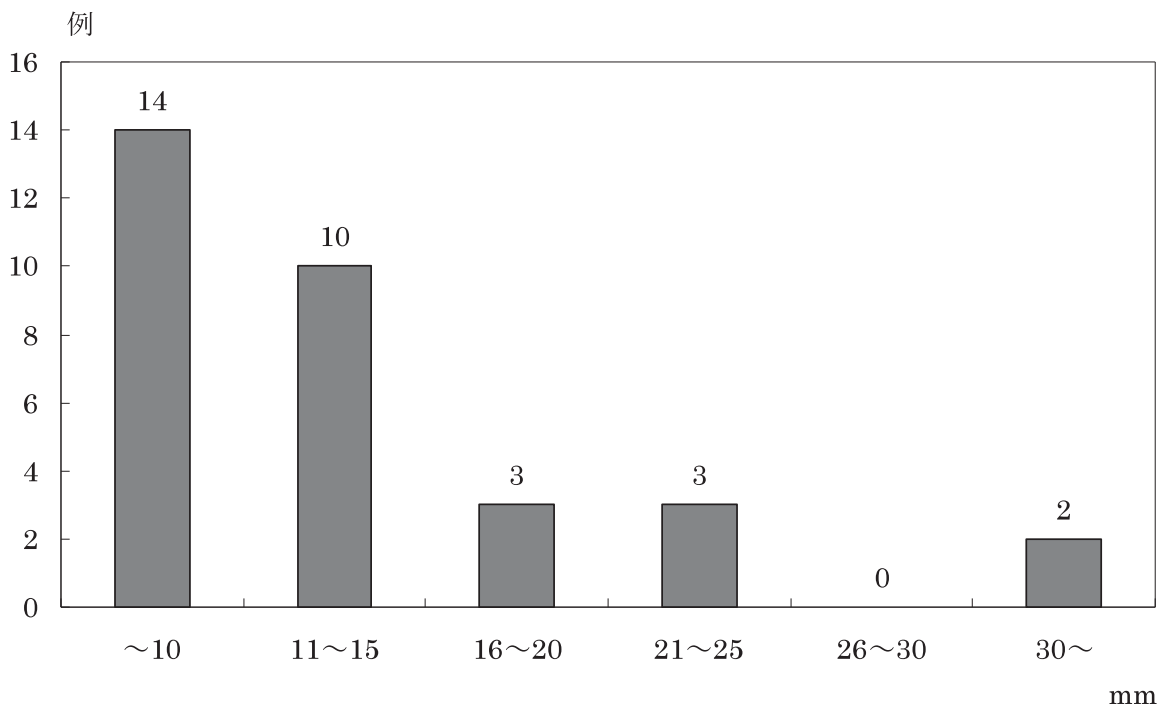


図4 摘出物の最大径

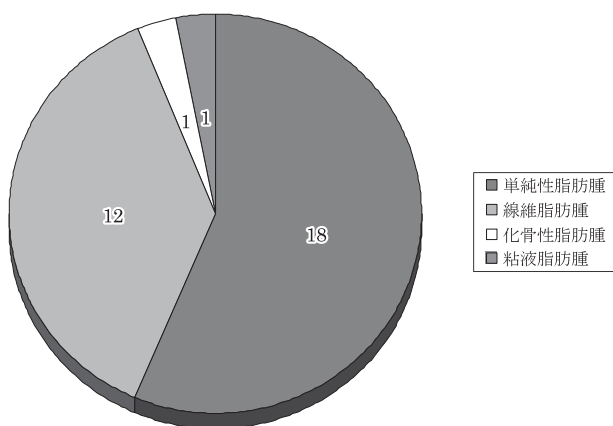


図5 病理組織学的診断

【考 察】

骨および軟組織腫瘍の WHO 分類 (2002)<sup>11)</sup>によると、全身の良性腫瘍のうち、およそ 30%が脂肪腫、30%が線維腫、10%が血管腫、5%が神経鞘腫であるとされている。脂肪腫が口腔顎顔面領域に発生することは従来まれであると考えられていたが、われわれが渉猟し得た限りでは、本邦だけでも 1987 年から 2004 年までに 9 施設より、多数例の臨床統計的報告がみられ<sup>2-10)</sup>、200 例の集積検討が可能であった (表 2)。今回自験例と他施設の多数例報告論文とを比較し、考察を加えた。

1. 性別および年齢

自験例では明らかな性差は認められず、40 歳以上が全体の 81%を占めており、中高年層に多い結果であった。本邦他施設の報告では、男性にやや多いとするもの<sup>2,6-10)</sup>と性差がないとするもの<sup>3-5)</sup>に大別されるが、9 施設<sup>2-10)</sup>の 200 例をまとめると、男性 115 例、女性 85 例で、男女比は 1.4: 1 であり、男性にやや多い傾向であった。また、いずれの施設<sup>2-10)</sup>も 40 歳以上に多いという見解で一致していた。

2. 病悩期間

自験例では病悩期間の長いものや、指摘されるまで自覚がなかったものが多く認められた。本腫瘍の増殖が緩慢であり機能障害をきたすことが少ない点や、無痛性である点などが病悩期間を長くする要因であると思われた。

3. 発生部位

自験例では頬粘膜が 11 例と最も多く、次いで舌 8 例、下唇 7 例の順であり、他の報告<sup>2-10)</sup>とほぼ一致していたが、歯肉、口底に生じたものは各 1 例のみで、比較的少なかった。口腔外に生じたものは 3 例のみであり、口腔内と比較して少なかったが、遠城寺ら<sup>12)</sup>によると、顎下部および頸部領域の脂肪腫の発生頻度は全身のうち 22.3%で好発部位の 1 つであると報告されており、口腔外に発生するものについては一般外科などの診療科を受診する例も多いのではないかと推察される。本邦 9 施設<sup>2-10)</sup>の脂肪腫 200 例のうち、口腔内に発生した 178 例の発生部位の内訳は、頬粘膜が 75 例 (42%)、舌が 32 例 (18%)、下唇が 22 例 (12%)、歯肉が 21 例 (12%)、

表2 本邦9施設の脂肪腫200例の概要

報告者		鈴木ら2)	辻野ら3)	石川ら4)	立石ら5)	岡本ら6)	田中ら7)	福田ら8)	滝沢ら9)	関根ら10)	計
報告年		1987	1989	1991	1993	1996	1998	1999	2000	2004	
検討年数(年)		22	24	23	15	10	8	15	15	26	
症例数(例)		33	30	38	20	14	12	7	22	24	200
性別(例)	男	21	16	22	11	8	6	4	13	14	115
	女	12	14	16	9	6	6	3	9	10	85
発生部位(例)	頬粘膜	11	11	9	7	7	6	5	7	12	75
	舌	5	3	7	5	2	1	0	3	6	32
	下唇	5	2	4	2	3	0	2	2	2	22
	歯肉	2	4	6	2	1	2	0	4	0	21
	口底	2	1	2	1	0	0	0	2	3	11
	歯肉頬移行部	0	4	0	2	1	0	0	0	0	7
	軟口蓋	2	1	1	0	0	0	0	0	1	5
	硬口蓋	0	1	1	1	0	1	0	1	0	5
	下顎骨内	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	頬部	2	0	3	0	0	0	0	0	0	5
	オトガイ下	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2
	顎下	3	1	3	0	0	1	0	0	0	8
	頸部	1	1	2	0	0	0	0	0	0	4
	不明	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
病理診断(例)	単純性脂肪腫		24	32	10	6	9	4	20	21	126
	線維脂肪腫		5	5	7	7	3	2	2	2	33
	粘液脂肪腫		0	0	2	0	0	0	0	0	2
	血管筋脂肪腫		1	0	0	1	0	0	0	0	2
	血管脂肪腫		0	0	1	0	0	1	0	0	2
	軟骨脂肪腫		0	1	0	0	0	0	0	0	1
	筋肉内脂肪腫		0	0	0	0	0	0	0	1	1

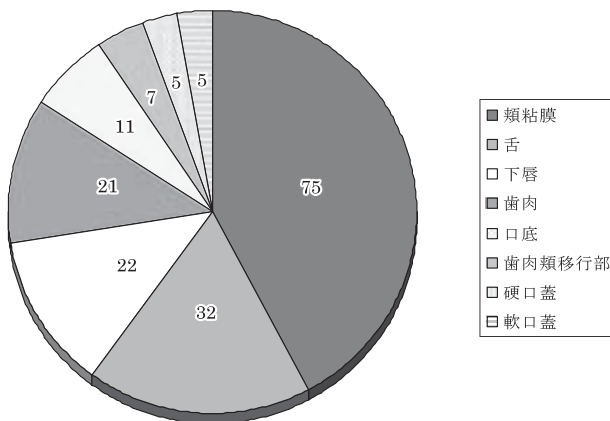


図6 口腔内脂肪腫の発生部位  
—本邦9施設178例について—

口底が11例(6%)、歯肉頬移行部が7例(4%)、硬口蓋、および軟口蓋が各5例(3%)であった(図6)。多発例は6例(3%)で、その内訳は舌が5例、頬粘膜が1例であった。脂肪腫の多発例が舌に多い理由としては、他部位と比較して舌には脂肪組織が豊富に存在するためと考えられている<sup>5,10)</sup>。顎骨内に発生した脂肪腫の報告は少なく、今回の集積例には1例も認められなかった。われわれが渉猟し得た限りでは、本邦での報告は自験例を含めて4例のみである<sup>13-15)</sup>。骨内脂肪腫の成因に

については未だ定説がなく、自験例についても成因は不明であった。

#### 4. 臨床診断

脂肪腫は皮下あるいは粘膜下に無痛性で弾性軟の腫脹をきたし、表層の皮膚や粘膜は正常であるが、上皮直下に存在する場合は黄白色を呈することがあると言われている<sup>1)</sup>。しかし、すべての脂肪腫がこのような典型的な特徴を示すわけではなく、自験例においても半数は線維腫や単に良性腫瘍と診断されていた。特に、病理組織学的に線維脂肪腫と診断されるものは単純性脂肪腫と比較して硬く、臨床診断が多様であると言われている<sup>5,6)</sup>。自験例において病理組織学的に単純性脂肪腫と診断された18例のうち、臨床的に脂肪腫と診断されていたものは12例(67%)であったのに対し、線維脂肪腫と診断された12例のうち脂肪腫と診断されていたものは4例(33%)のみであった。脂肪腫の画像検査としてはCTが有用であり、CT値の1つである Hounsfield unit (HU) 値が -100 unit と脂肪組織に対して特異的であることから診断できる<sup>2,4-7)</sup>。しかし、一般に軟組織腫瘍の画像検査においては、腫瘍内部性状の描出や周囲組織との境界の見極めに優れているといった点などからMRIの方が有用であり<sup>11)</sup>、脂肪腫においてもT1強調画像で比較的高信号を示すという特異性がある。他の軟組織腫瘍と

の鑑別も考えると、脂肪腫に対する画像検査においてはMRIが優先されるべきであると考えられる。

### 5. 摘出物の大きさ

摘出物の最大径は、自験例では20mm以下のものが27例と多く、他の報告<sup>2-10)</sup>と同様の結果であった。発生部位による大きさの違いは明らかではなかったが、口腔外に生じた3例は口腔内のものと比較して大きい傾向にあった。

### 6. 病理組織学的診断

脂肪腫のなかには、病理組織学的に豊富な線維性組織の混在した線維脂肪腫、骨形成をみる化骨性脂肪腫、軟骨形成をみる軟骨脂肪腫、広範に粘液腫様変化をみる粘液脂肪腫、小血管が混在する血管脂肪腫、および平滑筋線維が混在する筋脂肪腫などがあるとされている<sup>11)</sup>。本邦9施設のうち病理組織学的診断の記載のある8施設<sup>3-10)</sup>の脂肪腫167例の病理組織診断の内訳は、単純性脂肪腫が126例(75%)、線維脂肪腫が33例(20%)、粘液脂肪腫、血管筋脂肪腫、および血管脂肪腫が各2例(1.2%)、軟骨脂肪腫、および筋肉内脂肪腫が各1例(0.6%)であった(図7)。この結果より、脂肪腫はほとんどが単純性脂肪腫であり、線維脂肪腫も珍しくなく、他はきわめてまれであると言える。硬組織を形成する脂肪腫はまれであるが、化骨性脂肪腫は軟骨脂肪腫と比較してもより希少であると言われており<sup>16)</sup>、今回の集積例には1例も認められなかった。われわれが渉猟し得た限りでは、本邦における口腔顎顔面領域の化骨性脂肪腫の報告は自験例を含めわずか2例のみであった<sup>17)</sup>。また、粘液脂肪腫もまれであり、今回の集積例では2例のみであった。

通常、脂肪腫は線維性被膜によって覆われているため、被膜上で切除すれば再発することはないが、骨格筋線維に沿って浸潤性に増殖する種類のもは腫瘍が残存しやすく、再発することがあると言われており<sup>1)</sup>。また、まれではあるが悪性化することもあると言われてお

り<sup>6,8,9)</sup>、さらに脂肪腫と脂肪肉腫の鑑別は困難であるとされているため<sup>18)</sup>、腫瘍は出来る限り一塊で摘出し、一塊で摘出できない場合には特に慎重な経過観察が必要であると考えられる。

## 【結 語】

過去21年間に当科で経験した口腔顎顔面領域の脂肪腫32例について臨床的検討を行った。自験例と本邦他施設の報告例を比較すると、顎骨内に発生した1例、および病理組織学的に化骨性脂肪腫、粘液脂肪腫と診断された各1例はきわめて珍しい例であった。

本論文の要旨は、第55回(社)日本口腔外科学会総会(平成22年10月、千葉市)において発表した。

## 【引用文献】

- 1) 林堂安貴, 岡本哲治: 良性非上皮性腫瘍. 白砂兼光, 古郷幹彦監修: 口腔外科学, 第3版, 医歯薬出版, 東京, 2010, 239-240.
- 2) 鈴木三郎, 塩入重彰, 他: 頸部に発生した脂肪腫の1例と臨床統計的観察. 日口外誌 33:1252-1257, 1987.
- 3) 辻野元博, 由井俊平, 他: 過去24年間の頭頸部領域脂肪腫30症例の臨床統計的観察. 日口外誌 35:1307-1311, 1989.
- 4) 石川明寛, 藤村長久, 他: 顎口腔領域における脂肪腫の臨床的, 病理組織学的検討. 日口外誌 37:2068-2074, 1991.
- 5) 立石 晃, 三瀬恒太郎, 他: 口腔内脂肪腫の臨床病理学的観察—当科における20症例を中心に—. 日口外誌 39:276-280, 1993.
- 6) 岡本圭一郎, 和田 健, 他: 口腔の脂肪腫の臨床病理学的検討—過去10年間の当科症例と文献的考察—. 日口外誌 42:270-276, 1996.
- 7) 田中正司, 西田紘一, 他: 当科で経験した脂肪腫の臨床統計的検討. 日口診誌 11:189-193, 1998.
- 8) 福田徳子, 重松可明, 他: 当科における脂肪腫に関する臨床的検討. 日口診誌 12:69-74, 1999.
- 9) 滝沢邦生, 上條竜太郎, 他: 口腔内に発症した脂肪腫の22例の臨床的検討. 昭和歯会誌 20:485-488, 2000.
- 10) 関根 元, 小川 淳, 他: 口腔脂肪腫の臨床病理学的検討. 日口診誌 17:17-19, 2004.
- 11) G.P. Nielsen, N. Mandahl: Lipoma. Christopher D.M. Fletcher, K. Krishnan Unni, et al.: Pathology and Genetics of Tumours of Soft

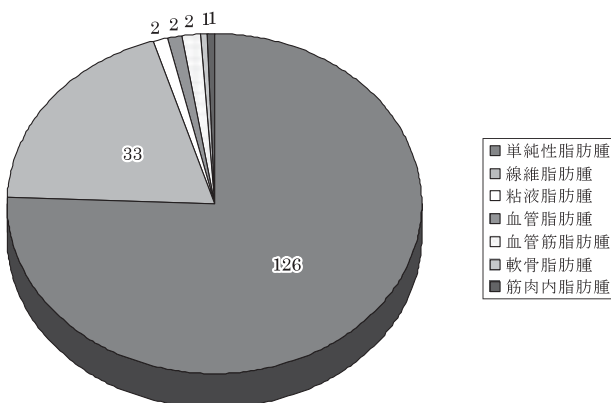


図7 病理組織学的診断  
—本邦8施設167例について—

- Tissue and Bone. IARC Press, Lyon, 2002, 20-22.
- 12) 遠城寺宗知, 岩崎 浩, 他: わが国における良性軟部組織腫瘍—8,086 例の統計的観察—. 癌臨 20:594-609, 1974.
  - 13) 小網達矢, 西嶋 寛, 他: 下顎骨に発生した脂肪腫の 1 例. 日口外誌 41:875-877, 1995.
  - 14) 鏡内 肇, 平沼 勉, 他: 下顎骨に発生した脂肪腫の 1 例. 日口外誌 49:394-396, 2003.
  - 15) 橋口範弘, 島原政司, 他: 下顎骨内に発生した脂肪腫の 1 例. 日口外誌 54:12-15, 2008.
  - 16) Castro A, Castro E, et al.: Osteolipoma of the buccal mucosa. Med Oral Patol Oral Cir Bucal 1: 347-349, 2010.
  - 17) 吉川郁子, 大西祐一, 他: オトガイ下に発生した骨および軟骨形成を伴う脂肪腫の 1 例. 日口外誌 47:141-144, 2001.
  - 18) 君塚 哲, 岡田みわ, 他: 口腔に発生した脂肪肉腫の 2 例. 日口外誌 54:334-338, 2008.